―さいたま市―

Ⅰ　期日　令和５年 10 月 11 日（水）　：授業研究
　　令和５年 11 月 16 日（木）　：さいたま市教育研究研修大会
※本年度は、10 月に見沼区の小学校で行われた授業研究について、11 月の研修大会で協議をした。研修大会当日は授業実践の模擬授業を参会者で行い、協議を行った。

Ⅱ　会場　さいたま市立東宮下小学校　：授業研究
　　さいたま市立教育研究所　　：さいたま市教育研究会研修大会

Ⅲ　研究主題「学びをつなぎ、家庭生活をよりよくしようと工夫し実践する児童の育成」

Ⅳ　題材名「ミシンでソーイング」～自分だけのエプロンを作ろう～」
　授業者　さいたま市立東宮下小学校　青木　翠
　指導者　さいたま市教育委員会学校教育部指導１課指導主事　小林　由美恵　先生

Ⅴ　研究の概要

視点１　問題を見いだし、解決すべき課題を設定する力の育成に向けた指導の工夫

今年度さいたま市では、昨年度、西部地区（坂戸市立南小学校）の研究を基に、小学校家庭科の目標（２）「日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなど、課題を解決する力を養う」を実現するために、「問題を見いだして課題を設定する」学習過程を充実させることに重点をおいて取り組んだ。生活の課題発見の場面では、「子どもが生活の中から問題を見いだすための手立て」と「見いだした問題を課題の設定につなげるための手立て」が必要である。しかしながら、日常生活において児童が不便さを感じたり、より生活を豊かにしたいと考えたりする機会が少なくなっているのも現状である。

そこで、本題材では「子どもが生活の中から問題を見いだすための手立て」として、題材の導入時に見本用の「ミニエプロン」を２種類用意した。一つは、縫い目がまっすぐで正しい箇所が縫えているものであり、もう一つは、縫い目が曲がっていたり、縫うべき箇所が縫えていなかったりするものである。この２種類のエプロンを見比べながら、エプロン製作に向けて気を付けたいことや大切にしたいこと等について話し合い、どのように製作していきたいかという「ねがい」をもつことができるようにする。その後、「見いだした問題を課題の設定につなげるための手立て」として、ムーブノートを活用して一人ひとりの「ねがい」を全体で共有し、キーワードとなる言葉を集めながらクラス全体で題材を貫く課題を設定していった。

個人の課題や題材を貫く課題を明確にすることで、学習のゴールを児童にとってイメージしやすく、かつ主体的に自分に必要な知識・技能を身に付けていこうとする姿が見られると考える。

視点２　成長を実感できるようにする評価の工夫

ポートフォリオを活用し、課題の解決に向けて工夫したことや自己評価の記述内容から、個や全体に対しての次時への手立てを講じ、児童が課題解決や実践の評価・改善ができるようにしていく。特に製作過程においては、製作にあたっての記述や行動観察から主体的に学習に取り組む態度を評価し、うまくいかなかったことに対して粘り強く取り組む中で、自らの学習を調整できるよう指導を工夫する。また、ポートフォリオに導入時の自分の課題を記入し、題材の終末での実践報告会においてその課題の達成状況を自己評価することで、自分の知識・技能の高まりや、新たな課題を発見する力が育っていることを実感できるようにする。さらに、製作した作品を生活の中で繰り返し活用したり、これからの生活を豊かにする作品をさらに製作したりしようとする態度についても育んでいく。

視点３　小・中・高のつながりを意識した学習指導の工夫

Ｂ衣食住の生活（５）「生活を豊かにするための布を用いた製作」は、中学校技術・家庭科　家庭分野にも同様の内容項目がある。第５学年の本題材においては、ミシンの操作を一人で行うことができるよう基礎・基本となる知識・技能を確実に身に付けられるよう指導していく。タブレットを用いて操作手順を繰り返し確認できるようにしたり、ペアやグループの友達の実習の様子を見ながら質問したりすることが容易にできる雰囲気づくりを大切にしていく。そして、第６学年では、身に付けた知識・技能を活用し、製作計画を自分なりに工夫したり、自分で製作手順を決めたりしながら個別最適な学習の充実を図る学習展開を取り入れられるようにしていく。知識・技能の確実な定着を図ることで、児童がミシンはとても便利な道具であり、それを活用して布を用いた作品を製作することは楽しいと感じられるようにしていく。そうすることで、中学校における製作に関する内容の学習においても、自分や家族の生活に役立つ物の製作や、不要となった布製品を作り変えて活用することへの興味・関心が高められるのではないかと考える。

Ⅵ　実践事例

１　題材名　「ミシンでソーイング」～自分だけのエプロンを作ろう～

Ｂ衣食住の生活　（５）ア（ア）（イ）イ

２　題材について

本題材は、小学校学習指導要領内容Ｂ「衣食住の生活」の（５）「生活を豊かにするための布を用いた製作」を受けて設定したものである。ここでは、生活を豊かにするための布を用いた製作について、課題をもちながら、製作に必要な材料や手順、製作計画、手縫いやミシン縫い及び用具の安全な取扱いに関する基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、製作計画を考え、製作を工夫することができるようにすることをねらいとしている。

現在、児童を取り巻く社会は物資があふれ、お金を出せば容易に布製品を買うことができる環境にある。学校で使う雑巾や道具を入れる袋なども買って持ってくる実態がある。本題材では、生活をよりよくするための必要感を感じさせながら、学校生活と家庭生活両方で活用することのできるエプロンの製作を通して、手作りのものを活用する喜びを味わわせ、家庭生活を豊かに楽しく、よりよくしようと工夫し実践する力を身に付けさせたい。

本題材であるＢ（５）及び他教科等との関連、中学校との系統性は【関連図：省略】に示す通りである。家庭科での系統性や他教科等での学習を踏まえ、関連付けることで、学習の深まりや広がりにつながり、学んだことが生活に生きるということを実感できる題材であると考える。

３　題材の目標

（１）　製作に必要な材料や手順が分かり、製作計画について理解する。また、手縫いやミシン縫いによる目的に応じた縫い方及び用具の安全な取扱いについて理解するとともに、それらに係る技能を身に付ける。【知識及び技能】

（２）　生活を豊かにするために布を用いた物の製作計画や製作について問題を見いだして課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなどして課題を解決する力を身に付ける。【思考力・判断力・表現力】

（３）　家族の一員として、生活をよりよくしようと、生活を豊かにするための布を用いた製作について、課題の解決に向けて主体的に取り組んだり、振り返って改善したりして、生活を工夫し、実践しようとする。【学びに向かう力、人間性等】

４　題材の指導と評価の計画（11 時間扱い）

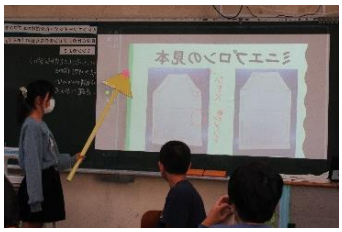
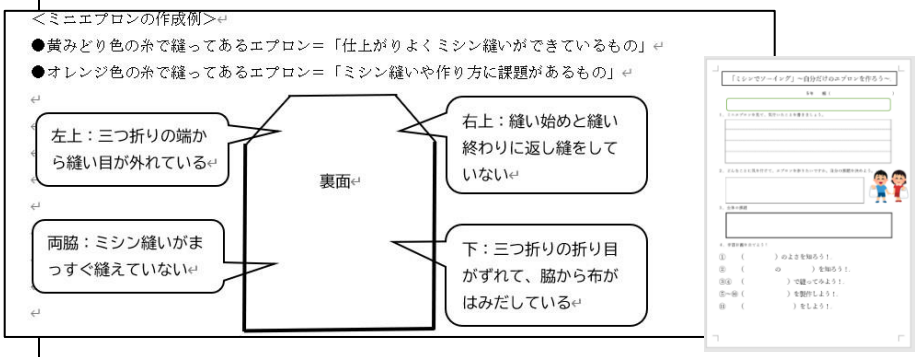
小題材 （時間）	ねらい・学習活動	評価		
		知・技	思･判･表	主・態
1 布製品のよさを知ろう（1）	○生活を豊かにするための身の回りの布製品や手縫い･ミシン縫いについて、問題を見いだして課題を設定する。 ・布製品のよさについて考える。 ・ミシン縫いのよさを探る。 ・２種類のミニエプロンを見て、縫い方や布の始末等を比較し、個人の課題を設定する。 ・設定した課題を共有し、学習計画を立てる。		○	
2 ミシンの使い方を知ろう（1）	○ミシンの安全な取扱い、基本的な使い方について理解し、適切に直線縫いを行うことができる。 ・ミシンの安全な使い方について考え、話し合う。 ・ミシンの準備、片付けの仕方をタブレットで調べる。 ・空踏みや空縫いを行い、ミシンの動き・速さや布の進む方向を確認し合い、実際の直線縫いを行うことでミシンの操作を知る。 ・直線縫いをする。	○		
3 練習布で縫ってみよう（2）	○布の端の始末を学び、練習布を用いて縫う練習をする。 ・端の始末をしているものとしていないものを比較し、必要性について考えて理解し、二つ折り・三つ折りができるようにする。 ・布がほつれないようにするための返し縫いの仕方を考えて理解し、できるようにする。	○	○	
4 エプロンを製作しよう（6）	○エプロンの製作について考え､問題を見いだして課題を設定しながら工夫して製作計画を立てることができる。 ・できるようになったことを活用し、計画を立てる。 ○製作に必要な布の大きさが分かり、手順について理解することができる。 ・必要な布の大きさや材料を考える。 ○製作計画を基に縫い方や手順を考え、工夫して製作することできる。 ・製作計画に沿って学んだ知識・技能を生かして製作する。 ・グループで製作に取り組むことで、意見を出し合いながら、よりよい布製品が完成できるようにする。	○	○	○
5　実践報告会をしよう（1）	○エプロンの製作について、実践を評価したり、改善したりして、製作に対する意欲を高める。 ・自分や家族が使ってみてどのように役立ったか、自分の気持ちや感想、作品のよい点等を話し合う。 ・友達の発表やコメントから自分の作品を評価したり、改善したりする。 ○布を用いた製作物について、生活を工夫し、実践しようとしている。 ・自分の学習を振り返り、何ができるようになったか、どう頑張ったか、これからどう生活に生かしていきたいかを共有する		○	○

5　本時の展開

（1）　目標

生活を豊かにするための布を用いた布製品の製作について問題を見いだして課題を設定することができる。【思考・判断・表現】

（2）　展開

学習活動	☆授業のポイント　◇評価規準
1　布製品のよさや背景について考える。 ビニール袋が破けてしまったという先生の体験から身近に様々な素材があることにふれ、布製品のよさにつなげていた。	☆ビニール袋が破けてしまったという話から、素材の種類とよさを確認した。 ・丈夫さ・便利（袋）・清潔（洗える）・リメイク ・物や大きさに合わせて作れる　等 ☆実物（ミシン）を見せ、ミシンで縫うよさを確認する一方でミシンを使ったから必ず綺麗に縫えるわけではないことを確認した。 ・大きなものを作れる・短い時間で作れる ・縫い目がきれい
2　ミシン縫いのよさについて考える。 3　本時のめあてを確認し、学習の流れをつかむ。	自分だけのエプロンを作るための「課題」を立てよう。 
4　2種類のミニエプロンを観察し、製作するときに気を付けたい点等をグループで考え、全体に共有する。視点１ 	☆児童に気づかせたいポイント 〇返し縫いをしていない 〇まっすぐ縫えていない 〇三つ折りの端から縫い目が外れている・縫い目がずれてはみだしている 
5　どのように作りたいか考え、個人で考えたことを全体で共有し、題材を貫く課題をつくる。	☆児童が考えた個人の課題に使われている言葉をキーワードとして、全体の課題をつくる。その際に、ムーブノートの集計機能を利用して多かった言葉から、全体の課題をつくる。
6　学習計画を立てる。	①（布製品）のよさを知ろう！ ②（ミシンの使い方）を知ろう！ ③④（練習布）で縫ってみよう！ ⑤～⑩（エプロン）を製作しよう！ ⑪（実践報告会）をしよう！
7　学習のまとめ・振り返りをする。	☆ポートフォリオに振り返りを記入する。視点２

6　研究協議と指導

研究課題：「問題を見出して、課題を設定する」場面の授業づくりについて

（1）　模擬授業　　授業者：谷田小学校　佐藤　里莉　教諭

※東宮下小学校で行われた授業（前頁指導案）を再現するために、推進委員が模擬授業を行った。

（2）　見沼区での実践報告　　見沼区各校の家庭科主任より

（3）　グループ協議

① 課題設定場面のパターンについて検討

② 全体のめあてにつなげるための集約方法の検討

③ 学習計画の立て方についての検討

④ 評価方法についての検討

（4）全体協議

①把握した児童の実態を基に、体験を通して課題をつかませる。

実態をつかむ→〔方法：アンケート、生活経験の把握等〕

→ 経験に差がある

→ 共通の体験を通し、児童を皆同じ土俵に乗せる。

②個人の課題の内容からキーワードを洗い出し、文言を整理する。

体験、実践を通してどのような姿に育ってほしいのか＝資質・能力

→ 児童と教師が、目指す資質・能力を具体の姿でイメージできるような課題を設定する。

③問題解決の過程を児童と共に考える。

題材構成の重要性→児童とつくりあげたい「どのように学習を進めたら、ゴールに辿りつけるのか。」

→ 課題をつかむのは必ずしも１時間目の授業とは限らない

課題設定へのアプローチの仕方

〇アンケート等で実態を把握した上で、

・実体験をさせる。

・見本や実物を比較する等。

（5）指導講評　（　〇模擬授業に対して　　◇今回の研修に対して　）

〇問題解決型の学習について、全国的に実践が広がっている。どのように展開していくか難しさもあるが、今回のようにぜひ挑戦していってほしい。

〇よい見本と、課題のある見本であるミニエプロンを実際に作成して示すことで、よりこれからの製作に向けての具体的な課題を見つけることができていた。

〇B の内容（衣食住の生活）と C の内容（消費生活環境）に加えて、A の内容（家族・家庭生活）を含めていくとよい。自分のできることが増えることで、家族のために役立ちたいという気持ちを掻き立てたい。

◇今回の研修は授業参観ではない形式だったが、模擬授業を行うことで、紙面上では分かりにくいところをイメージしやすく、十分効果的であった。

◇見沼区では、各学校の児童の実態に応じて指導を工夫していた。５年生では基礎を重視し、６年生では工夫の方を重視することで、同じ系統内でのレベルアップも見られてよかった。

◇グループ協議では自分の問題に気付くための手立てについて議論された。「課題」を挙げる際に、できていない部分だけではなく、「今の自分」と「なりたい自分」のギャップを埋めるための要素を課題として意識することも大切である。児童に困り感がなくても課題をもたせることはできる。

（6）成果と課題

・(当日授業公開が実施できなかったため）模擬授業を行い、参会者と共通のベースをつくり、協議することとした。それにより授業の実践と研究協議の在り方について新しい視点をもつことができた。

・「問題を見出して、課題を設定する」場面の授業づくりについて、具体の題材を基に様々な視点から検討することで、展開の工夫等を整理することができた。

・課題設定へのアプローチ方法を工夫する必要性を感じた。いかに児童が「自分事」として課題と向き合えるか、その支援ができるような授業について市をあげて深めていきたい。

―南部・北足立南部―

授業について

○研究主題 『学びをつなぎ、家庭生活をよりよくしようと工夫し実践する児童の育成』

○題材名「こんだてを工夫して」

内容Ｂ（１）イ　（２）イ　（３）（ウ）イ　内容Ｃ（１）（イ）イ　（２）イ

○研究主題との関わり

研究の視点

視点１　主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の展開

主体的な学び：・初めの授業で前の日の夕食の献立のバランスを振り返る

・最終的に「家族のために１食分の献立を立てる」ことを毎時間意識させる。

・献立を立てる際には「テーマ」「誰のために」「そのテーマにした理由」を明確にする。

対話的な学び：・授業中の中に対話の場面を取り入れる。

※対話を取り入れる場面→家族のために１食分の献立を考える

視点２　草加市幼・保・小・中一貫教育を念頭においた指導計画

小学校・１食分の献立を立てる

・「ゆでる」「いためる」調理法を行う

・肉・魚は加工品を使う

中学校・１日分の献立を立てる

・「焼く」「煮る」調理法を行う

・生の肉・魚を使う

上記の内容を教師が頭に入れて指導を行うとともに、小学校で身に着けておくことを確実に身に着けさせる。

○本時の様子

７　本時の学習指導（小題材〔３〕１０／１１時）

（１）目標

・家族のための１食分の献立について友達と意見を交流し、献立や食事の仕方がさらに良くなる工夫を考える。

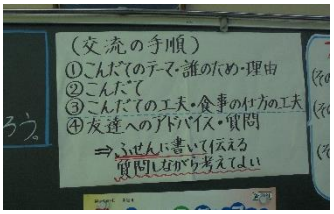
（２）展開

時間	学習活動	○教師の支援と指導上の留意点　◆評価規準　（評価方法）
５分	１　前時までに学習した献立や食事の仕方の工夫の観点を確認する。	《工夫の観点》 献立　栄養バランス、色どり、味のバランス、 食事の仕方　盛り付け方、食器、テーブルコーディネート、会話、メッセージ、音楽など ○献立の内容以外にも、家族のためにできる食事の仕方の工夫があることを押さえる。 ○自分で考えた献立の食事を家族に食べてもらうときに、どんな気持ちになってほしいか考えさせ課題を設定する。
	２　本時の学習課題を把握する。 学習課題　家族にさらに喜んでもらえる献立や食事の仕方にするには、どうすればよいのだろう。	

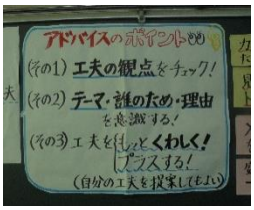
前時までに学習した工夫の観点を共有することで、誰でも工夫を考えられるようになっていた。

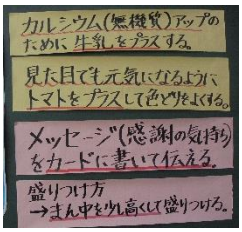
5分	3　交流の仕方を知る。 <交流の手順> ① 献立のテーマ・誰のため・理由 ② 献立 ③ 献立の工夫・食事の仕方の工夫 ④ 友達へのアドバイス・質問 ⇒ふせんに書いて伝える ☆質問しながら考えてよい	○友達へのアドバイスを付箋に書いて伝えるようにさせる。 ○アドバイスのポイントやアドバイスの仕方の例を提示し、アドバイスしやすいようにする。 <アドバイスのポイント> ・工夫の観点をチェック ・テーマ、誰のため、理由を意識する ・工夫をもっと詳しく プラスする（自分のアイディアを提案しても良い） ☆質問しながら一緒に考える
15分	4　グループで交流する。	○意見があまり出ていないグループには、お助けカード（工夫できそうな観点）を渡し、考えの手助けとなるようにする。
5分	5　友達との交流を参考にして、献立や食事の仕方がより良くなるよう考える。	○修正・付け足したところ青鉛筆で書くようにさせる。 ○どうしてそのように修正・付け足ししたのか理由を確認書かせる。 ○アドバイスされていなくても、友達の工夫を参考にして考えを取り入れても良いことを伝える。 予想される児童の考え ・無機質が足りないからみそ汁にわかめを追加する。 ・色どりで赤がないからサラダに追加する。 ・お母さんの好きな食材を増やす。 ・パーティー感を出すために普段あまり使わないお皿にする。 ・弟が喜ぶように盛り付け方を顔の形にする。 ・特別感を出すためにランチョンマットを敷く。

交流の手順を明確にしていた。



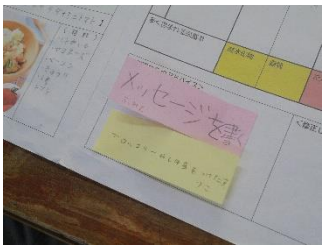
アドバイスのポイントを明確にしていた

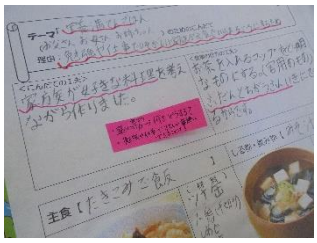




交流の様子

具体例も出していました。





<u>その他のアドバイスの例</u>

・そのおかず合わなそう！　・メッセージつけたら？　・食器をくふうしてみたら？

・盛り付けの工夫もできそう！　・無機質が少なくない？

	◆評価規準　友達との意見交流をふまえて、家族がさらに喜ぶように献立や食事の仕方を工夫している。 【思考・判断・表現】（評価方法　ワークシート） ・B→A　一つの観点だけでなく、複数の観点で工夫できるように促す。 ・C→B　友達に何と言われたか具体的に聞き、それを参考に献立や食事の仕方の工夫を一緒に考える。	
8分	6　工夫したことを発表する。	○児童のワークシートを画面に映し、何を修正したのか分かりやすくする。 ○どうしてそのように修正したのか理由を確認する。
3分	7　学習のまとめをする。 まとめ　家族に対する思いやりの心を持って考えることで、献立や食事の仕方をより良くすることができる。	
3分	8　本時の学習をふり返る。	○本時の学習をふり返り、考えられたこと・感じたことを書くようにさせる。 ○献立を立てる際の工夫として、中学校では、栄養バランス以外に予算や調理時間、季節感等を考えることを伝え、中学校での学習のイメージを持たせる。
1分	9　次時の学習内容を知る。	○冬休みに家庭実践を行ってくることを伝える。 次時では、今までの学習を振り返り、単元を通しての課題に対する考えをまとめることを伝える。

発表の様子

〇授業者振り返り

・最初は献立のみの工夫にしていたが、そうすると栄養素のみ工夫に集中してしまうため、食事全体の工夫に変更を加えた。
・児童に目的意識をもって、献立作りに取り組めるように注意した。
・小学校でできる範囲が限られているため、その中から献立を立てるのが難しい。
・児童の言葉を生かして「課題・まとめ」ができるよう意識した。

研究協議について

視点①・②について、グループ協議を行い、全体に発表し、意見交換をした。
〇…良い点　　▲…改善点　↓…改善策

視点①
違う考えをもった児童同士のグルーピングによる話し合いをすることで、児童の考えに深まりや広がりは見られたか。

〇話し合いのグループが３人で、時間的にも適切だった。
〇意図的に異なる意見をもった児童をグルーピングしていたのが良かった。交流によって、自分では気づけなかったことに気づけていた。
〇先生があらかじめ用意していたアドバイスの付箋が的確だった。先生からのアドバイスを見て、より話し合いが深まっていた。
〇「交流の手順」が書かれていた掲示物が良かった。何を話せばいいのかが明確になっていた。
〇ワークシートがカラー印刷されていて、メニューが想起しやすい。付箋を貼るスペース等、ワークシートの工夫が良かった。
〇付箋と板書の色分けがそろっていて、分かりやすい。

▲友達の献立を聞いてすぐにアドバイスをするのは難しい。友達のワークシートを見る時間が少なくて、アドバイスをもらえなかった児童もいた。
↓
事前にワークシートを見ることができていたら良かった。
▲今回は、異なる意見をもった児童をグルーピングしていたが、同じ意見同士でも良いのではないか。（カルシウムが足りない人同士で考える等）
▲テーブルコーディネートのアドバイスは難しそうだった。普段からの経験が少ない。
↓
テーブルコーディネートの写真を用意しておくと、分かりやすくなる。「おうちレストラン」にしよう、などの声掛けをすると分かりやすい。
▲GIGA スクール端末を活用し、献立や写真が見られるようにしておくと、献立を考える場面や、いろいろな児童からのアドバイスをもらう場面で役に立つだろう。

視点②

献立の「テーマ」「誰のための（献立か）」「（そのテーマにした）理由」を明確にすることで、主体的な学習となっていたか。

○「テーマ」「誰のための（献立か）」「（そのテーマにした）理由」がワークシートにしっかり明文化されていたことで、児童が目的意識・相手意識をもって取り組んでいた。
○特に「誰のため」という点において、個々の児童の独自性が出ていた。相手のことを考えた発言が多く出ていた。
○先生の切り返しの発問（「みんなだったら、どうしますか。」）が良かった。

▲アドバイスもらった後、再考する時間があると良かった。
▲話し合う時に論点がずれてしまったグループがあった。「お母さんに温かい料理を」というテーマだったのに、「お母さんの好きな料理」について話し合っていた。
↓
「（そのテーマにした）理由」を話し合いの中心にもっていくと良かった。
▲付箋をもらう時に、観点に沿って評価をしてもらうと良かった。その際に、「なぜ、そうしたのか？」という話し合いができると良い。
▲「誰のため」という観点が友達には伝わりにくい。相手が分からないとアドバイスしにくい。
↓
ワークシートに相手の顔写真を入れたり、相手のイメージ（好きなもの・頑張っていること・嫌いなもの）が書かれていたりすると良い。
▲漠然とアドバイスをもらうのではなく、アドバイスが欲しい観点を友達に伝えられると良い。
▲献立の組み合わせ（和食と洋食、中華料理などが混ざっていた）や、量（カロリー）という観点も入れられると、中学に向けて系統性がある。

指導講評について（川口市立仲町小学校　校長　佐藤　朋子先生）

1、「学習過程」の工夫　～題材全体を見通す～
・この題材を通して、どんな児童になってほしいかを考える。例えば、調理実習がゴールではなく、調理実習を通して、どのような資質・能力を育成するか。（内容ベースではなく、「資質・能力」ベース）
・題材のスタート時に、ゴールの「資質・能力」が育成された児童の姿をイメージする。
・生活の課題発見→解決方法の検討と計画→課題解決に向けた実践活動→実践活動の評価・改善→家庭・地域での実践、という流れで授業をデザインする。

2、本時の展開より
・鈴木教諭は担任ではないということだが、児童の実態をよく把握されている。
・事前アンケートで児童に「家族意識」が低いことに気付いて、題材を工夫したところが良い。
・思考の工夫（お助けカード）と対話の工夫（グルーピング）が良かった。
・前時までの児童の「学びたい！」を引き出すために、本時の目標が「献立がさらに良くなる工夫を考える」になっていた。

３、「思考・判断・表現」の観点に関する評価

・「思考・判断・表現」の観点は、①課題設定する力、②解決方法を考える力、③実践した結果を評価・改善する力、④考えたことを分かりやすく表現する力の４つ。

・見えにくいものを見取り、評価する必要がある。目の前の子どもの学びの姿をどれだけ見取ることができるかは、重要な教師力。この教師力を高めることが、授業の質を高め、子どもの資質・能力を育んでいく。

・学習活動に即した評価規準を、具体的に設定する。評価規準となる子どもの姿を、指導案に載せて言語化することで、子どもの姿が見やすくなる。見えるようになる。

４、「学びに向かう力、人間性等」

・「粘り強い取り組み」や「自らの学習の調整」、「実践」を見取る。「ノートを綺麗に書いている」や「忘れ物をしない」ということではない。

・「自らの学習の調整」の具体的な姿…学習したことを振り返り、自分なりの課題や新たな課題を見つけている姿／課題が解決した後も、もっとよく、もっとうまくできないか考える姿／他の人の考え方、方法のよいところを取り入れてみる姿

５、「知識及び技能」

・「分かった」「覚えた」「できた」だけでなく、「なぜそのようにするのか」を大切にする。

・〇〇の調理ができた！で終わらせず、なぜそのようにするのか、根拠とともに理解すると別の場面で活用できる。

６、見方・考え方を働かせる

・見方・考え方は、教えることでなく、働かせるもの。

・働かせるのは「子ども」、働かせることができるようにするのは「教師」。そのために、①発問の工夫、②場の設定の工夫、③教材の工夫をする。

―北部・大里―

Ⅰ　期日　令和５年 11 月 21 日（火）
Ⅱ　会場　深谷市立深谷西小学校
Ⅲ　研究主題「食生活への関心を深め、自分の食生活をよりよくしようと工夫し、実践する児童の育成」
Ⅳ　題材名「食べて元気に」５年
　授業者　深谷市立深谷西小学校　教諭　山田有佳里
　指導者　埼玉県立総合教育センター指導主事　大山　方住　先生
Ⅴ　研究主題設定について
　生活様式や家庭環境の変化により、かつて家庭科で伝えられてきた食生活の知識や技能などは、様々な面で伝わりづらくなっている。また、成長期の児童にとって食事がとても重要なものであるにも関わらず、普段の食事への関心は低く、無意識に食べている様子がある。一方で、児童は家庭科が好きで、実際に体験したいと考え、学んだことを家庭でも実践したいと思っている。そこで、児童が実際に体験した林間学校でのカレー作りや調理実習を関連付けることで、なぜ食事が大切なのか、どうするとよりよく食べることができるのかを主体的に考えさせ、意識させたい。
　指導にあたっては、食品の分類、話し合い活動等、題材を通して計画的にタブレットでロイロノートを活用し意見の交流をする。また、給食でお世話になっている栄養士をゲストティーチャーとして招いたり、家庭での実践を意図的に計画したり、実生活に繋げる工夫を図っていく。この学習を通し、児童が食を大切にする心情を養い、自分の食生活をよりよくしようとする態度や実践力を育みたい。
Ⅵ　実践事例
１　題材名　「食べて元気に」　　B（１）ア（２）ア（ア）（イ）（ウ）（オ）イ（３）ア（ア）（イ）A（１）ア
２　題材について
　本題材は、自分の食生活について課題をもって栄養素の種類と主な働き、食品の栄養的特徴及び１食分の献立作成に関する基礎的・基本的な知識を身につけることをねらいとしている。
　「よりよい食生活」の実現に向けて、「健康」という見方・考え方を働かせながら自分の食生活の改善への具体的な見通しをもち、学校や家庭の食事の場で実践できる児童を育てる。
　健康的な食生活を送ることを意識するために、児童が栄養的な知識や考え方の必要性を感じ取り、実際の生活でどのような改善ができるかを具体的に考えさせるようにする。
　１学期にゆでる調理実習・なぜ調理をするのかを学習した。今までの学習を踏まえてなぜ食事をとるときに様々な食品を食べるのかというところから、栄養バランスに着目させたい。そして５年での調理と関連付けながら献立作成の基礎に触れ、６年生で行う献立を立てる学習につながるようにしたい。
　全体の 96％の児童が家庭科の授業で学習したことを生活に生かして行きたいと考え、授業で身に付けた知識や技能を日常生活で実践し定着を図った。
３　題材の目標
（１）食事の役割と食事の大切さ、我が国の伝統的な配膳、伝統的な日常食である米飯及びみそ汁の調理の仕方について理解するとともに、それらに係る技能を身につける。
（２）食品の栄養的な特徴が分かり、身体に必要な栄養素の種類と主な働きについて理解する。
（３）おいしく食べるために米飯及びみそ汁の調理計画や調理の仕方について課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価し、考えたことを表現するなどして課題解決する力を身につける。
（４）家族の一員として、生活をよりよくしようと、伝統的な日常食である米飯及びみそ汁の調理について、課題の解決に向けて主体的に取り組んだり、振り返ったりして生活を工夫し、実践しようとする。
４　題材の指導と評価の計画（９時間扱い）

時間	○ねらい・学習活動	評価規準・評価方法		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1	○なぜ、食事が必要なのかに気づき、ご飯とみそ汁作りのための米やみその特徴がわかる。 ・毎日の食事について振り返りなぜ食べるのかを知る。 ・米やみその特徴について調べる。 ・家庭でおいしいご飯の炊き方を聞いてくる。	①食事の役割が分かり日常の食事の大切さについて理解している。（観察） ②我が国の伝統的な配膳の仕方について理解している。（観察）	①おいしく食べるために米飯及びみそ汁の調理計画や調理の仕方について計画を立て、実践し、振り返っている。（ワークシート）	

2 3	○ご飯炊きの調理の仕方を理解するとともに、ご飯炊きの技能を身につける。 ・おいしくご飯を炊くための調理の仕方を知る。 ・透明な鍋で炊飯を行い、米の変化を観察する。 ・みそ汁の作り方を家庭で聞いてくる。	③ご飯炊きの調理に必要な材料の分量や手順が分かり、調理計画について理解している。（ワークシート） ④ご飯炊きの調理の仕方を理解しているとともに、適切にできる。（観察） ②我が国の伝統的な配膳の仕方について理解している。（観察）		①伝統的な日常食である米飯及びみそ汁の調理の仕方について、課題の解決に向けて主体的に取り組もうとしている。（ワークシート）
4 5	○和食の基本となるだしや、みそ汁の調理の仕方を理解するとともにみそしるづくりの技能を身につけている。 ・だしの重要性を感じる。 ・みそ汁を作る手順を調べる。	③みそ汁の調理に必要な材料の分量や手順が分かり、調理計画について理解している。（ワークシート） ④みそ汁の調理の仕方を理解しているとともに、適切にできる。（観察） ②我が国の伝統的な配膳の仕方について理解している。（観察）		
6	○オリジナルのみそ汁作り・お米の炊飯の計画を立てる。 ・どのように工夫したら家の人の好みに合うみそ汁が効率よく調理ができるか考える。		②おいしく食べるために米飯及びみそ汁の調理計画について考え工夫している。（ワークシート）	②伝統的な日常食である米飯及びみそ汁の調理の仕方について、課題解決に向けた一連の活動を振り返って改善しようとしている。（ワークシート）
	○家庭実践			
7	○食品に含まれている主な栄養素の主な働きにより、食品を３つのグループに分ける方法が分かる。 ・食品を食べた際の体内での主な働きは、含まれる栄養素によって違うことを知り、食品が３つのグループに分けられることを知る。	⑤食品を３つのグループに分ける方法を理解している。（ワークシート）		
8 本 時	○食品の栄養的な特徴について課題の解決に向けて主体的に取り組み、五大栄養素の種類と体内での働きが分かる。 ・食品を見て３つのグループに分ける。 ・3 つのグループがそろっていればバランスが良いわけではないことを知る。	⑤五大栄養素について知り、主食・主菜・副菜を組み合わせることにより、栄養バランスの整った食事になることを理解している。（ワークシート）		

	・食品は五大栄養素に分けられることを知る。 ・主食・主菜・副菜を組み合わせることにより栄養バランスの整った食事になることを知る。			
9	○実践報告会をしよう。 ・家でのみそ汁とご飯の実践を写真などを使って報告する。 ・実践を自分で振り返る。		③おいしく食べるために米飯及びみそ汁の調理計画や調理の仕方について、実践を評価したり、改善したりしている。（ワークシート） ④おいしく食べるために米飯及びみそ汁の調理計画や調理の仕方についての課題解決に向けた一連の活動について、考えたことをわかりやすく表現している。（ワークシート）	③伝統的な日常食である米飯及びみそ汁の調理の仕方について工夫し、実践しようとしている。 （ワークシート）

5　本時の学習指導（本時８/９時）

（１）　目標

五大栄養素の分け方を理解し、食品を組み合わせることにより、栄養バランスの整った食事になることを理解している。　【知識・技能】

（２）　展開

時間 （分）	学習指導　・児童の活動	○教師の支援と指導上の留意点 ◇評価規準　→手だて
導入 （８分）	1　前時の復習。 ・3 つのグループには、何があったか、実習した食材や林間学校で使った食材、給食に出てくる食材はどこに分類されるかを全体で確認する。 2　本時の学習課題を知る。 五大栄養素を調べ、３つのグループに分けてみよう。	○3 つの色の食品グループについて意識させるためにそれぞれどんな食品があったかを確認する。 ○どこに分類されているかを児童と確認しながら黒板に掲示していく。 ○五大栄養素というものがあることを伝え、子どもたちが生活経験を通して考えていけるようにする。
展開 （４分） （６分） （10 分）	3　知っている栄養素を発表する。 ・今まで学習した栄養素や、聞いたことのある栄養素などを発表する。 4　出た栄養素をグルーピングしていき、五大栄養素を確認する。 ・五大栄養素は、炭水化物・脂質・タンパク質・無機質・ビタミンであることを知る。 5　五大栄養素は 3 つのグループのどこに分類されるかを個人で考え、グループで	○今までに学習した内容や普段の経験から考えるよう声掛けする。 ○画面共有でロイロノートを映し、児童から出た栄養素を書いていく。 ○児童に問いながら、グルーピングする。 ○画面共有でロイロノートを映し、テキストを動かしてグルーピングする。 ○普段の給食の放送や今まで学習してきたことを思い出しながら考えるよう促す。

(5分)	意見を共有する。 6　全体で五大栄養素は３つのグループのどこに分類されるのかを確認する。 ・主にその栄養素がふくまれていることを確認する。	○なぜそのように分けたかをグループで共有する。 ○児童のタブレットを画面共有し発表できるようにする。 ◇五大栄養素の分け方を理解している。 →机間指導 →タブレット
終末 (7分) (5分)	7　学習のまとめをする。 五大栄養素は３つのグループに分けることができる。 ３つの食品グループから色々な食品を組み合わせてとることで五大栄養素をバランスよくとることができる。 8　学習を振り返り。明日からの食事でどのように生かしていきたいかを書く。	◇食品を組み合わせることにより、栄養バランスの整った食事になることを理解している。 →発言・タブレット ○本時の授業で学んだことを活かして書くよう声掛けをする。

板書計画

㊝五大栄養素を調べ３つのグループに分けてみよう。

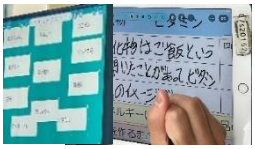
五大栄養素	主にエネルギーになる黄色の食品	主に体をつくる赤色の食品	主に体の調子を整える緑色の食品	題材計画
	炭水化物　脂質	たんぱく質　無機質	ビタミン	

㊜五大栄養素は３つのグループに分けることができる。
３つの食品グループから色々食品を組み合わせてとることで五大栄養素をバランスよくとることができる。

6　授業の様子と研究との関わり

（１）主体的・対話的
・個で考えてからグループで話し合い活動をしての深い学び。
・栄養士をゲストティーチャーとして招き対話的に栄養素を分け理解する。

（２）学校・家庭・地域連携
・児童が知っている栄養素（家での会話、食育の授業、生活環境から）の名前を出させグルーピングしていく際に、栄養士をゲストティーチャーとして活用。



（３）ICT
・タブレットでロイロノートを活用し意見の交流をする。
・画面共有でロイロノートを映し、テキストを動かしてグルーピングする。

1　授業者振り返り

・生活経験が少ない児童もいる中、家庭科の授業を楽しみにしていて意欲的な児童が多い。
・五大栄養素の分け方を理解し、食品を組み合わせることにより、栄養バランスの整った食事になることを理解することを目標にして授業を考えた。五大栄養素には、何があるか知って３つのグループに分けられることを

目指した。教え込みの授業にならないように、生活経験を生かしながら五大栄養素を捉えて欲しかったが生活経験の乏しい児童も少なくなかったので、悩んだ点であった。
・教え込みの授業にならないよう、主体的に考えられる授業の展開を考えた。
・画面共有でロイロノートを映し、テキストを動かして、栄養教諭と共に児童が知っている栄養素を発表させ、児童に問いながら五大栄養素にグルーピングできた。
・五代栄養素は３つのグループのどこに分類されるかを個人で考え、グループで意見を共有する時間が足らなかったことが改善点である。
・振り返りに、これからは、栄養素を意識しながら食事をしたいといった内容が多く書かれていたので、意図した内容が学習できたのかと思う。

２　研究協議

①　教え込みがちになってしまう栄養の授業をどのように主体的な学習にするか。
・今回ロイロノートを使ったことで、全員が取り組めていた。（書くことが苦手な児童に対して今回のタブレット活用が有効であった。）

②　児童の生活経験の差が大きく生活経験を生かした授業をするには難しさを感じたがどうすればよかったのか。
・共通体験として給食、林間学校等があるので、今できなくても、学習したあとできるようになればよい。

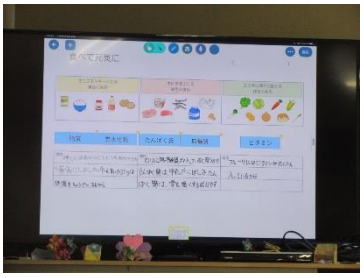
３　指導講評

◎教育課程を踏まえて五大栄養素の授業を提案してもらった。
・児童は、家での会話や食育の授業、CM など生活環境から栄養素の名前を知っているので自由に出させ、グルーピングしていく。さばききれなければ、健康、快適、安全の視点を働かせて食べることの意義に気づかせたい。栄養教諭に声をかけ、活用しながら進めていくことも大切である。

◎五大栄養素のゴールは？
・中学校で一日分の食事を考える。（栄養素と食品の量）→小学校では一食分の献立を考える。
小学校では、食品を赤（体をつくる）、黄（エネルギーのもと）、緑（体の調子を整える）の３つのグループに分けられるのが最低ライン。３つの働きがどこで五大栄養素に繋がっているのかがポイントである。短期では身につかない。５年生のこの題材だけでなく、５年生、６年生とスパイラルに考えた栄養に関する学習を長期計画で学習していき、中学校へ繋げていく。より良い学習指導要領の実施をめざし、原点に立ち返るという視点が必要ではないかと思う。

◎主任会を活用した教材研究
・主任会などで掲示物を作る際にデジタルのものを作るのも、時代的には必要。例えば主菜・副菜などのレシピ集を作ってクラウドに保存しておけば、授業で献立を立てるときに個々に選んで活用できる。

◎家庭科とは
・「教えるべきことをきちんと教える」楽しかっただけで終わりにしない。例えば、トートバックを作った際には、縫い代やゆとりの必要に気づかせることが大事で、実習には意味があることを踏まえた授業が大切である。何を教えるのかしっかりふまえて授業に取り組んでほしい。

◎指導と評価
・評価計画を立てることは大切であり、それを考える事で題材の全体像を把握できる。題材計画を立てていれば、本時の展開や評価も適切に行うことができる。（指導と評価の一体化）
・知識・技能では、２つ（理解している・できる）思考・判断・表現４つ（課題を設定する・計画を工夫する・工夫、改善する・考えたことを表現する）主体的に学習に取り組む態度３つ（工夫しようとしている・改善しようとしている・実践しようとしている）が入っていることが望ましい。また、知識においては、指導に生かす評価と記録に残す評価を適切に設定することが大切である。

◎学び続ける教師像
・児童生徒の変容が確認でき、それを楽しいと思えることが大切。
・教師自身にとっても主体的で対話的で深い学びが重要。